

# Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名: 国際収支(2013年8月)

発表日2013年10月8日(火)

～所得収支が弱めだが、一時的要因と考えられる～

第一生命経済研究所 経済調査部  
担当 エコノミスト 星野 卓也  
TEL : 03-5221-4526

	原数値 経常収支 (億円)	季調値 経常収支 (億円)	貿易・サービス収支			所得収支	
			貿易収支	サービス収支			
2012	7月	6,625	3,602	▲ 7,558	▲ 4,936	▲ 2,622	12,106
	8月	4,448	6,559	▲ 4,984	▲ 2,590	▲ 2,394	12,400
	9月	5,137	▲ 402	▲ 11,951	▲ 8,980	▲ 2,971	12,368
	10月	4,208	5,010	▲ 6,403	▲ 4,498	▲ 1,905	12,144
	11月	▲ 1,796	3,633	▲ 7,179	▲ 5,092	▲ 2,087	11,744
	12月	▲ 2,307	2,152	▲ 8,537	▲ 6,331	▲ 2,206	11,983
2013	1月	▲ 3,484	4,356	▲ 7,805	▲ 6,062	▲ 1,743	11,923
	2月	6,497	▲ 207	▲ 13,100	▲ 11,465	▲ 1,635	13,573
	3月	12,831	3,672	▲ 9,100	▲ 7,704	▲ 1,396	13,555
	4月	7,844	8,976	▲ 8,984	▲ 8,023	▲ 961	18,964
	5月	5,666	6,464	▲ 4,789	▲ 4,776	▲ 13	12,462
	6月	3,777	6,930	▲ 6,545	▲ 5,751	▲ 794	14,343
	7月	5,773	3,337	▲ 10,390	▲ 9,219	▲ 1,170	14,633
	8月	1,615	3,518	▲ 7,382	▲ 5,643	▲ 1,739	11,603

(出所)財務省「国際収支統計」

## ○経常収支（季節調整値）は前月から横ばい

8月の経常収支（原数値）は1,615億円の黒字（コンセンサス：5,481億円、レンジ：2,343～7,573億円）とコンセンサスを下回る結果となった。所得収支の黒字が1兆2,530億円（前年比：▲10.0%）と9ヶ月ぶりに縮小したことが、コンセンサス下振れの背景と考えられる。

経常収支の季節調整値をみると、3,518億円の黒字（7月：3,337億円の黒字）となった。貿易・サービス収支の赤字が縮小したものの、所得収支黒字が縮小したため、経常収支全体ではほぼ横ばいであった。もっとも、後述するように所得収支黒字の急減は一時的なものである可能性が高い。貿易収支は年初をボトムに赤字縮小の動きがみられる点を踏まえると、経常黒字は緩やかな拡大基調にあるとの評価が妥当だろう。

貿易収支（季節調整値）をみると、赤字幅が7月から縮小（7月：▲9,219億円→8月：▲5,643億円）している。輸入金額が前月比▲0.0%と横ばいとなる中、輸出額が増加（前月比+6.5%）したことが背景だ。足もとの輸出は、米国向けや欧州向けなどの回復を支えに緩やかな持ち直し傾向にある。こうした輸出の持ち直しを支えに、貿易赤字は年初を底に縮小の動きが窺える。

## ○直接投資収益が弱めだが、一時的な動きと考えられる

貿易外収支（季節調整値）をみると、所得収支は1兆1,603億円の黒字（7月：1兆4,633億円の黒字）と黒字幅が大きく縮小しており、8月経常黒字の縮小要因となっている。内訳をみると、直接投資収益（7月：5,010億円の黒字→8月：2,424億円の黒字）の縮小が主因であることが分かる。もっとも、単月では振れが出やすい項目であり、先行きの直接投資収益は①円高修正に伴う受取価額の増加、②米国など海外経済の回復

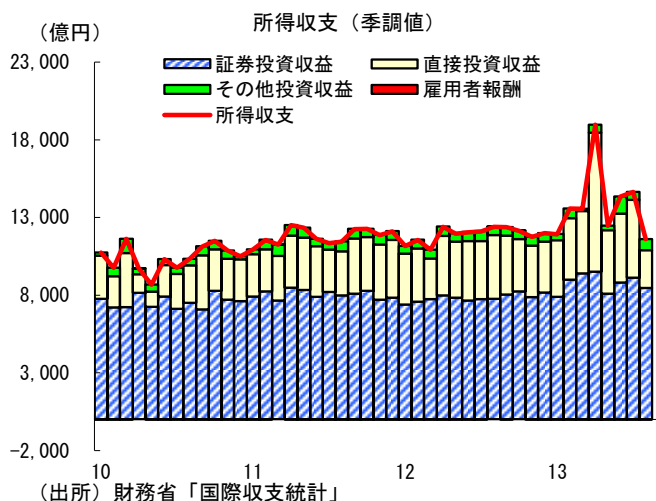
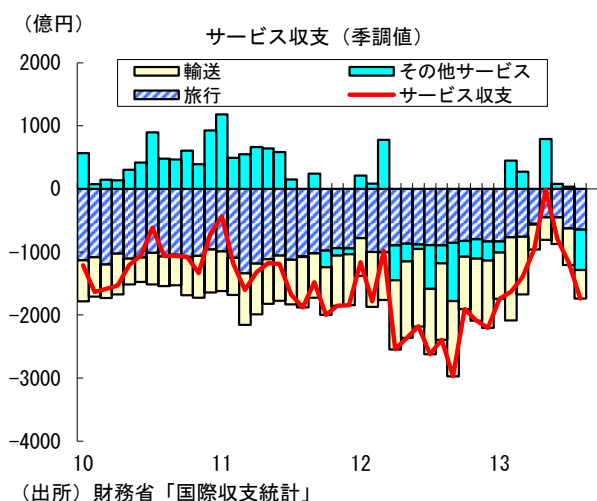
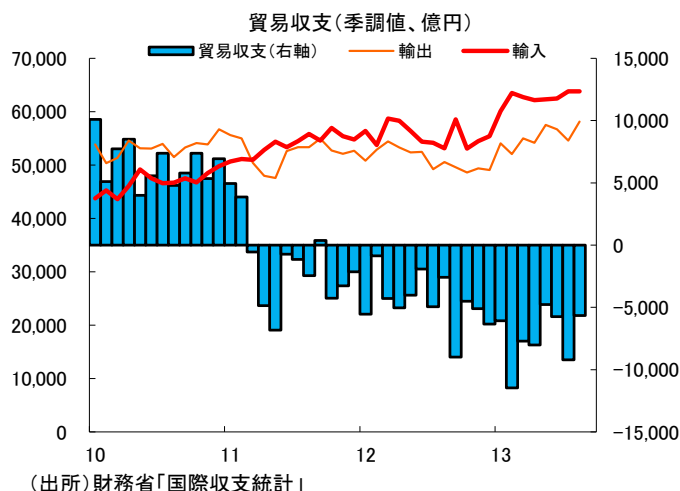
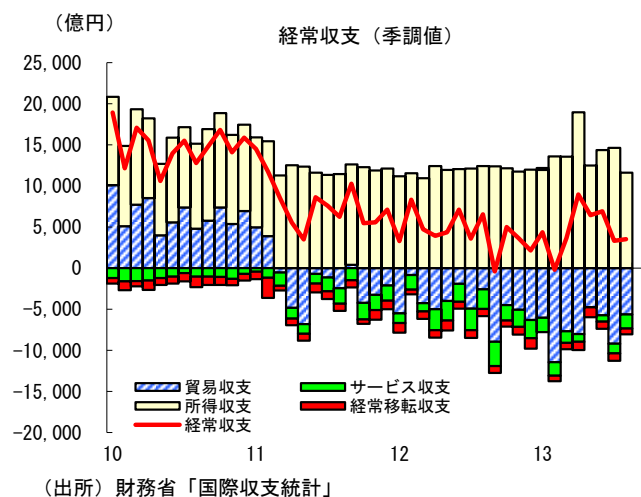
傾向、③昨年にかけて海外直接投資が活発化したことを背景に、拡大傾向での推移が予想される。証券投資収益に関しても、昨年末からの円高修正などを背景に水準を切り上げていこう。

サービス収支は、1,739億円の赤字（7月：1,170億円の赤字）となった。輸送収支赤字、旅行収支赤字の縮小などを背景に、赤字幅の縮小傾向が明確化していたが、足もとの縮小ペースには一服感が窺える。為替レートの円安傾向に落ち着きが生じていることなどが背景にあると考えられる。

### ○先行きの経常黒字は拡大傾向での推移を予想

このように、8月の経常黒字は横ばい圏での推移となった。ただし、振れによるものと思われる直接投資収益の急減が大きく影響している。基調としては輸出の回復に伴う貿易収支赤字の縮小を背景に、経常黒字は緩やかな黒字拡大局面にあると考えられる。

先行きの経常収支に関しては、緩やかに黒字を拡大していくとみている。海外経済の回復や円安効果の顕在化に伴い、輸出が回復傾向を辿る公算が大きいことがその理由である。燃料価格の高止まりを背景に輸入が高水準を維持するため、貿易収支の黒字化は当面見込めないが、輸出の拡大を支えに赤字幅は徐々に縮小へ向かうとみている。所得収支黒字についても、円安や企業の海外進出などを追い風に、拡大傾向を辿るだろう。経常収支黒字は緩やかな拡大傾向を辿る見込みである。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。